



Title	〈フレイ神ゴジ〉 フラヴンケルのサガ(改訳・その2)
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	大阪外国語大学学報. 1987, 74(1-2), p. 121-131
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81157
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

＜フレイ神ゴジ＞フラヴンケルのサガ (改訳・その2)

菅 原 邦 城

Hrafnkels saga Freysgoða (2)
A revised translation from the Old Icelandic

by Kunishiro Sugawara

12

サームは、^{シンダ}集会が解散されるまで待っている。解散になると人々は帰宅の準備を整える。サームは兄弟たちに彼らの援助の礼を言うが、ソルゲイルは笑いながらサームに、ことの進み具合をどう思うかと尋ねた。

サームは、満足に思っていますと答えた。

ソルゲイルは言った、「今の方が以前よりも少しはよくなったと思っているのか」

サームは言った、「フラヴンケルは、長い間忘れられないような恥をかいたと思いますよ。今度かいた恥ですが。これには大きな財産もからんでいますし」

「財産没収裁判が行なわれない限り、あいつは完全追放にはなっていない。この裁判はあいつの(法的)住所で行なわれなければならない。これは、武器再使用の後14日目と定められているぞ」
ところで、^{ヴァーファタラ}武器再使用とは人々が集会から立ち去る時のことだ。

「またわしは思うのだが」とソルゲイルが言う。「フラヴンケルは家に帰っていて、アザルボールに居坐るつもりだろう。そして、おまえたちを無視してゴジの地位を持ちつづけるだろうな。おまえの方はせいぜい、家に帰って、できることなら自分の屋敷に住みつづけるつもりなのだろう。わしは思うに、おまえはこの裁判で、フラヴンケルを法益剥奪者と呼べるまでのことをやったが、やつは今まで通り、大方の者に対して威しを続けることだろう。おまえはこれまでに頭を低くしなければいけないかもしれないぞ」

「そんなことはちっともかまいません」とサームは言う。

「勇ましい男だなあ」とソルゲイルが言う。「弟のソルケルはおまえを見捨てるようなことはしないだろう。あれは、おまえとフラヴンケルの問題の片が付くまでおまえを助ける気でいる。そうすればおまえは安心して暮らせる。わたしたちはこれまで一番かかわってきたのだから、兄弟でおま

えを助けなくてはならないと思われるかも知れないな。今度だけ、わしらはおまえと一緒に東部地方へ行こう。ところで、東部地方にゆく道で、ふつう使われていない道を知らないか」

サームは答えた、「同じ道を行けるでしょう」それは、彼が東部地方からやってきたのと同じ道のことだった。

サームは、このことを喜んだ。

13

ソルゲイルは自分の部下を選び抜いて、40人を同行させた。サームも40人を連れていた。この一団は武器と馬がよく用意されていた。その後彼らはずっと同じ道を進み、とうとう明け方にヨクルスダルに達して、川にかかっていた橋を渡る。これは、財産没収裁判が行なわれる当日の朝だった。

この時ソルゲイルが、どうしたら一番よく不意打ちをかけることができるだろうかと尋ねる。

サームは、いい方法を知っていますと言った。

彼はすぐに道からそれていって、突き出た山腹へ上がっていき、それからフラウンケルスダルとヨクルスダルの間の尾根に沿っていき、とうとう一行はアザルボールの農場がその下にある山の麓に出て来る。そこでは草が茂った窪地が上手の荒原にのびていたが、急な坂が谷へ下っており、その下に農場があった。

そこでサームは馬から下りて言った、「馬を放しておきましょう。そして20人が馬の番をする。私たち60人は屋敷を攻めるのです。(屋敷では) 起きている者はほとんどいないと思いますよ」

こうして彼らはそのようにしたが、それ以来この場所はフロッサゲイルル(「馬の細道」と呼ばれている。彼らは屋敷に急行した。時刻は、起床時(真夏は5時頃)を過ぎていた。しかし屋敷の人たちは起きていなかった。彼らは棒で戸を打ち破って、中に飛び込んだ。フラウンケルは自分のベッドで休んでいた。彼らはこれと、武器が扱える家人全員を捕えて引きずり出した。女子供は一室に追いたてられた。前庭には納屋が立っていたが、これから母屋の壁に物干し竿が1本かけ渡してあった。そこに彼らはフラウンケルと家人たちを引き立てていく。フラウンケルは自分と家人たちのために色々と嘆願した。しかし、そうしても何の役にも立たなかったとき、彼は家人たちの命乞いをする。「家人たちはあんたたちに対して何の罪も犯していないからだ。しかし、あんたたちがわしを殺したとしても、それはわしにとって不名誉でない。わし自身の命乞いはしないが、拷問だけは勘弁ねがいたい。そんなことをしても、あんたたちにとって名誉にはならん」

ソルケルは言った、「わたしたちが聞いたところでは、あんたは味方でない者たちには優しくなかったそうだが、そのことを今日こんどはあんたが自分の体で知るのも悪くないな」

そこで彼らはフラウンケルと家人たちを後ろ手に縛り上げた。そのあと彼らは納屋をこじ開けて掛け鉤からローブを取り外した。それから小刀を取って敵の連中の腿に穴をあけ、それにローブを通し、そのまま竿に投げあげる。こうして、彼らは8人の男と一緒に縛った。

この時ソルゲイルが言った、「フラウンケル、どうやらあんたに似つかわしい、いいざまになっ

たな。今されているような辱しめを自分が他人から受けようなんてことは、考えられないと思っているかもしれないな。ところでソルケル、おまえはどっちがしたい？連中の番か、それとも、サームと屋敷の柵の外に出て、矢の届く範囲内で、耕地でも牧草地でもない、岩の山で財産没収裁判をしたいか」

後のことは、太陽が真南にある時刻に行なうものとされていた。

ソルケルは言った、「わしはここでフラウンケルのそばにしよう。こっちの方がよけい面倒くさくないようだから」

そこでソルゲイルとサームたちが出かけて、財産没収裁判を行なった。そのあと屋敷に戻って、フラウンケルとその家人たちを下ろして前庭に坐らせた。この時、血が連中の目の所までしたたっていた。

その時ソルゲイルがサームに、フラウンケルにしたいと思うことをしてやれと言った、「今なら、やつを手玉にとるのは簡単だろうから」

するとサームは答える、「フラウンケル、あんたに次の二つから一つを選ばせよう。一つは、私の望む連中とあんた自身をこの屋敷から連れ出すこと。もう一つはあんたが殺されることだ。しかし、あんたは養わなけりゃならん者を多く抱えているから、その面倒を見るのを許してやろう。そして、命は助けてほしかったら、あんたの家の者をみんな連れてアザルボールを出ていけ。私があんたに決めてやる財産を持っていけ。こっちの方はほんの少々だろうが。私の方はあんたの屋敷とゴジ権をそっくりもらうことにする。これに、あんたや後継ぎたちは二度と権利を主張してはいけない。フリースツダル荒野の東よりこっち側に住むのもだめだ。これを承知する気があるならば、いま私と握手したらいい」

フラウンケルは言った、「こんな不面目よりも即座の死の方がましだと、多くの人は思うだろうが、わしにとっても他の多くの者にとってと同じに、許されるならば生きる方を選ぶということになるだろう。こうするのは何よりも一番わしの息子たちのためだ。わしが死んでしまったなら、あとに残った息子たちが世の中で成功するのは覚束ないだろうから」

それからフラウンケルは縛めを解かれ、そしてサームに一方的な裁定を認めた。

サームは財産のうち、自分がやろうと思ったものをフラウンケルに分け与えたが、それは取るに足らぬものだった。フラウンケルは自分の槍を持っていったが、その他に武器は何も携行しなかった。この日、フラウンケルは家の者みんなを引き連れてアザルボールから立ち去った。

この時ソルケルがサームに言った、「あんたがどうしてこんなことをするのか、わしには分からん。やつを命を助けたことを、あんた自身が一番後悔するだろうな」

するとサームは、ことはならなければならないようになるだろうと語った。

さて、フラウンケルは東の方へフリースツダル荒野を越えてフリースツダル（谷）を横切り、ラ

ガル河の東側に居を移した。湖（ログ）の上手に、ロクヒッラという小さな農場があった。この土地をフラウンケルは掛けで買った。なにしろ、彼の手持ちの金は農場の道具（を買うの）に必要なだけしかなかったのだ。

この事件について人々は、フラウンケルの傲慢がどんな末路をたどったか、大いに語り合った。そして多数の人が、高慢の寿命は短い、という古い諺を思い出すのだった。

フラウンケルの新しい土地は大きな、面積が広くて木の多い土地だったが、家屋は貧弱で、このために彼はその土地を僅かな値で買えたのだ。しかしフラウンケルは出費を気にしないで、林が大きかったからこれを伐って、堂々たる家を建て、これはその後フラウンケル屋敷と呼ばれた。ここはその後ずっと立派な農場と言われてきた。ここでフラウンケルは最初の一年、ひどく不自由な暮らしをした。彼は食料の大部分を漁でまかなった。屋敷の建築中、フラウンケルは大いに働いた。フラウンケルは最初の年、仔牛と仔山羊を飼育して冬を越させるのに成功し、そのため危険を冒して育てた生き物はほとんど全部生き延びた。それで、それぞれの家畜がほぼ二倍になったと言えるほどだった。この同じ夏、ラガル河は豊漁に恵まれた。これは地区の人々にとって家計の助けとなり、それはほぼ毎夏つづいた。

15

サームはフラウンケルの後アザルボールに居を定め、そのあと豪華な宴会を催して、フラウンケルのシングマンだった者たちを一人残らず招いた。サームは、フラウンケルの代わりに彼らの首領になる用意があった。人々はこれに同意したが、それでも疑いをもつ者たちもいた。

ショースタルの息子たちはサームに、自分の部下に対して親切で気前よく、役に立つ者となれ、誰であれ彼を必要とする者の援助者になれと忠告した。「そうしても、あんたが必要とする者があんたを助けないならば、そういう者たちは誰であれ、男でない。この忠告をするのも、あんたは勇敢な男に見えるので、何事もあんたにとってうまく行くようにとわたしが望んでいるからだ。いまはよく警戒して用心することだ。なにしろ、悪人共に気をつけるは難事、だからな」

ショースタルの息子たちは、フレイファクシとその群れを連れてくるために人をやって、あれほど取り沙汰されたこの名馬を自分たちは見たいのだと語った。

それから馬たちは連れてこられた。これを兄弟たちが眺める。

ソルゲイルが言った、「この馬どもは農場の作業に役立ちそうだな。わしはいいと思うのだが、こいつらは老いぼれてもう生きていけなくなるまで役に立つ仕事をする事だ。しかしこっちの種馬は他の馬よりも立派だとは思わないな。むしろ、多くの凶事の因になっただけ一層よくないというものだ。こいつには、今まで惹き起こしてきた人殺しの他に新たな人殺しを惹き起こしてもらいたくない。だから、こいつを所有している者（＝フレイ神）が受けとればいい」

こうして彼らは種馬を引いて草原を下っていく。（やってきた）川の側に断崖が一つあるが、その前方には深い淵がある。そこで彼らは種馬を断崖の上へと引っぱっていく。ショースタルの息子

たちは馬の頭に袋を一つかぶせ、それから長い棒を取って馬を前方に押し出して、その首に石を結びつける。こうして彼らは馬を殺した。その場所はそれ以来、フレイファクシの断崖という名で呼ばれている。

その下手に、フラヴンケルが所有していた神所がある。ここにソルケルは行くことを欲した。そして彼は、神像から飾りをみんな剥ぎ取らせた。そのあと神殿に放火させ、何もかも焼き落とさせる。

そのあと、招待客たちは帰宅の用意をし、彼ら（全員）にサームは立派な贈り物を与える。兄弟たちも帰宅の用意をする。サームは兄弟のどちらにも高価な品を選んでやり、彼らは互いに完全な友情を希望して、最上の友として別れる。兄弟たちはこうして西部地方に直行し、名声を得てソルスカフィヨルドに帰る。サームの方はソルビョルンをレイクスカーラルに住ませた。彼はそこに住めと言われたのだ。サームの妻はアザルボールの彼のもとに行き、そして彼はそこにしばらくの間住んだ。

16

フラヴンケルは東のフリョーツダルで、ショースタルの息子たちがフレイファクシを殺して神所を焼いたことを聞かされた。

この時フラヴンケルが答える、「神を信じるなんて馬鹿げたことだと思う」そして、自分は今後いっさい神を信じないと語り、それ以後は二度と犠牲を捧げず、このことを守った。

フラヴンケルはフラヴンケル屋敷に住んで、金を溜め込んだ。そして間もなく地区で大きな人望を得るようになった。そうして誰もが、彼の望むように立ったり坐ったりしようとした。

この時期に、ノルウェーからアイスランドに最も多数の船がやって来た。フラヴンケルの時代に、その地区は大方の土地が占有された。フラヴンケルに許可を求めることをせずには、誰も安穩にしていられなかった。そこでみんなは彼に自分の支持の約束もしなければならなかった。彼の方も自分の保護を約束した。彼はラガル河の東側の土地全体を自分の支配下に置いた。この集会地区は間もなく、彼が以前にもっていた地区よりもはるかに広く、住民の数もはるかに多くなった。それは、ずっとラガル河に沿ってスクリズダルにまで達していたのだ。今やフラヴンケルの性格に変化が生じていた。以前よりもはるかに人に好かれるようになった。彼は助力と気前のよさでは同じ気持ちを失くさずにいたが、それに加えてあらゆる点で前よりも人気を得、穏かで優しくなったのだ。

サームとフラヴンケルはしばしば会合で出会ったが、二人とも自分たちの争いについては思い出さなかった。こうして六年が過ぎていった。

サームは、自分のシングマンたちに人気があった。何故なら、彼は優しくて穏かで助けを惜しまず、そしてあの兄弟たちが彼に忠告したことを忘れずにいたからだ。サームは大層なお酒落だった。

（ある夏に）一隻の船が大洋からレイザルフィヨルドに入ってきて、船長はエイヴィンド・ビャルナソンだと云われている。彼は外国に七年間いていた。エイヴィンドは諸芸に精通し、また非常に勇敢な男になっていた。間もなく彼に、以前に起きた出来事のことが語られるが、彼はそれを大して気にもかけなかった。彼は出しゃばりな人間ではなかった。

サームは弟の帰国のことを聞くと、船まで馬を走らせる。こうして、彼ら兄弟は非常に嬉しい再会を果たす。サームは西のわが家に弟を招き、エイヴィンドもこれに快く応じて、サームに先に帰宅して彼の荷物のために馬を送ってよこしてほしいと頼む。彼は自分の船を陸に揚げて（越冬の）支度をする。サームは頼みを聞いて、わが家に帰り、そしてエイヴィンドのために馬を追ってゆかせる。彼の方は、自分の荷物の準備ができると、フラヴンケルスダルへの旅の準備をし、レイザルフィヨルドに沿って進んでいく。

彼らは五人連れだった。六人目はエイヴィンドの召使いの少年だった。彼は出自はアイスランド人で、エイヴィンドの親類だった。この少年をエイヴィンドは極貧から救って、一緒に外国へ連れていき、自分自身のように扱った。このエイヴィンドの立派な行ないは語り種となって、彼と並ぶ者はほとんどなかるうというのが、誰も的一致したことばだった。

エイヴィンドの一行はソーリスダル（異読「ソールスダル」）荒野を進んでいき、自分たちの前に16頭の荷を積んだ馬を追っていた。一行のうち二人はサームの家人で、あと三人は通商者だった。彼らはまた、みんな（明るい色に）染めた服を着て、見事な楯を持っていた。彼らはスクリズダルを横切って、ブルンガル広原と呼ばれている地点でフリョーツダルに至る尾根を越えて、ギル川砂洲へと下っていった。この砂洲はハッロルム屋敷とフラヴンケル屋敷との間で、（ラガル）河の東にある。彼らはラガル河に沿って、フラヴンケル屋敷の草原の下手を進んでいく。それから湖の上手を廻って、スカラヴァズ（浅瀬）でヨクル川を渡った。時刻はちょうど朝の5時と8時半の間になっていた。

湖のほとりに一人の女がいて、自分の衣類を洗っていた。女は、この男たちの行くのを目にする。この女中は洗濯物をそそくさとまとめて、屋敷に飛んで帰る。そして洗濯物を薪の山のところに放り出して、家の中に飛び込む。この時、フラヴンケルはまだ起きておらず、腹心の部下も数人広間に寝ていた。しかし使用人たちは作業に出かけていた。いまは干し草作りの盛りだった。

家の中に入ってくると女は語り始めた、「昔から云われている、齢を取れば誰でも臆病になるというのは、まったく本当だ。若い頃とった評判なんて大したことないよ。もしも後になってから不面目な憂き目にあってそいつを自分から諦めて、そして一度だってその埋め合わせをするだけの気力がないとしたらね。そんなまか不思議が、昔は勇ましかった男たちに実際起きているんだね。自分のてて親のもとで育て、あんたたちと比べりゃ取るに足りないやつだとあんたたちが思う連中の人生は、別だね。連中は一人前になると、外国をめぐるては行く先々で大物と考えられ、そして

それを土産にアイスランドに帰ってくりゃ、自分は首領方よりも偉いと考えるんだものね。エイヴィンド・ビャルナソンがここのスカーラヴァズで川を渡っていったんだよ。キラキラ光を放つくらい見事な楯を持ってね。あれは復讐するだけの値打ちのある立派な男だよ」女中は夢中になって語り続けるのだった。

フラヴンケルは起きあがって、女中に答える、「おまえは大方本当のことを言っているんだろうが、おまえの目論見がいいというわけではない。却っておまえは厄介を背負い込むのだ。南のヴィジヴォールに急いで行ってハルステインの息子の、シグヴァトとスノッリを呼んでこい。二人に、武器を扱える男たちを連れてわしのところに来るように頼むのだ」

彼は別の女中をフロールヴ屋敷に、フロールヴの息子たち、ソールズとハッリ、それからその屋敷にいる武器を扱える男たちを呼びに行かせた。彼ら二人はどちらも立派な、大変有能な男だった。

フラヴンケルは自分の家人たちも迎えにやらせた。彼らは総勢18人になった。彼らは勇ましい武装をした。そしてエイヴィンド一行と同じ所で川を渡るのだった。

18

その頃エイヴィンドたちは（フリューツダル）荒野にやってきていた。エイヴィンドは西に向かって進み、荒野のまん中に達した。そこはベルサゴトゥルと呼ばれている。草の生えていない沼地で、まるで泥ばかりの中を馬を進めるようなもので、泥はずっと膝や股まで、たまには腹まできた。それでも泥の下は、岩の台地のように固い。その西には実際、大きな岩だらけの荒原があるのだ。

そして、その岩の荒地にやってきたとき、召使いの少年が後ろを見て、エイヴィンドに言った。「わたしたちの後から来る人たちがいますよ」と言う。「少なくとも18人はいます。黒っぽい服を着た大きな男が馬に乗っています。フラヴンケル・ゴジに似ているようですよ。わたしは長い間見ておりませんけど」

エイヴィンドは答える、「それがわたしたちとどんな関係があるというのだ？フラヴンケルが馬でやってきたからといって恐れる心当りは何もない。わしはあの男に逆らったことなどないぞ。西の谷へ友人に会いに行く用でもあるのだろう」

少年は答える、「あなたに会おうとしているような気がします」

「何ひとつ知らんぞ」とエイヴィンドが言う。「兄のサームと和解してから二人の間に面倒があったなんてことはな」

少年は答える、「西に向かって谷まで逃げてください。そしたら、あなたは安全なはずですよ。わたしはフラヴンケルの気性を知っていますが、あなたを捕えられなければ、わたしたちには何もありませんでしょう。あなたに注意しさえすれば、あらゆるものに注意したことになるのです。罠に肝心の獲物がいないければ、わたしたちに何が起こったって平気です」

エイヴィンドは、自分は逃げないだろうと言った、「この連中がだれなのか分からないのだから

な。わしが全然調べもしないで逃げたりしたら、多くの人にお笑い種だと思われるだろうよ」

こうして彼らはその荒地の先を西へと向かう。やがて彼らの前に別の沼地が現われ、これはオックサミュールと呼ばれている。こちらは草ぼうぼうだ。その上、柔かくてぬかるみが無数にあってとても通ることなど叶わない。このために、ハッルフレズ老人は、遠廻りになるけれども上手に道を開いたのだ。エイヴィンドは西の湿地へと馬を進める。その頃に馬は泥の中にすっかりはまってしまう、一行は非常に手間どった。追跡者たちは、荷積みの馬がなかったために、速く進んでいった。こうして今やフラウンケルたちは沼地へと進む。その時、エイヴィンドたちは沼地を脱け出したところだった。そして、フラウンケルとその息子二人が彼らの目に入る。

同行者たちはこの時エイヴィンドに、逃げてくれと頼んだ。「もう難所はみんな通りました。沼地が双方の間にあるうちに、あなたはアザルボールに着けますよ」

エイヴィンドは答える、「わしは、自分が害を与えたことのない者たちから逃げるものか」

それから彼らは尾根に上がっていく。尾根には小山がある。小山の西側には、ひどく吹きさらしになっているハمامギの丘が一つある。その周りには小高い塚があった。エイヴィンドは丘に向かって馬を進める。そこで馬から下りて、追跡者たちを待つ。

エイヴィンドは言う、「すぐに連中の用向きを知ることになるう」

そのあと、彼らは丘の上に歩いていって、そこで石を少し掘り起こす。

その時フラウンケルの方は道からそれて、南の丘を目指す。彼はエイヴィンドに一言もことばをかけずに、直ちに攻撃をかけた。エイヴィンドはよく、男らしく防いだ。

エイヴィンドの召使いは、自分自身は戦闘に加わるほどに強くないと思い、自分の馬を捉えて西の方、尾根を越えてアザルボールに走って行って、サームに何が起きているかを告げる。

サームは直ちに行動を起こして、手勢を呼びにやった。そして総勢20人になった。この一行はよく武装されていた。サームは東の荒野へ、そして戦場となっている場所へと向かう。

その頃にはすでに双方の間に決着がついていた。そしてフラウンケルは戦闘（の場）から東の方へ向かって去った。エイヴィンドとその仲間は一人数らず斃れてしまった。

サームがまっ先にしたことは、弟がまだ死んでいないかどうかを調べることであった。追跡者たちの仕事は確実になされていた。五人はみんな命を落としてしまった。フラウンケル側でも12人が斃れ、6人が生き遁れた。

そこでサームはほとんど休みもしないで、仲間たちに、すぐに跡を追えと言った。こうして彼らはフラウンケルたちの跡を追うが、馬たちは疲労している。

この時サームは言った、「連中に追いつけるぞ。連中の馬は疲れているし、こっちのはみんな休ませてあるからな。連中が荒野を出ないうちに追いつくことも間もないだろう」

その頃フラウンケルは、東のオックサミュールを越え切っていた。

双方ともそのまま馬を走らせ、とうとうサームたちは荒野の端にやってくる。この時、彼にはフラウンケルが坂をずっと下っていったのが見えた。

そして言った、「どうやらここで引き返さなけりゃならんな。なにせ、フラウンケルは手勢を多く集められるだろうから」

このままでサームは向きを変え、エイヴィンドが倒れている所まで来て、彼とその仲間のために塚を築き始める。そこはエイヴィンダルトルヴァ、エイヴィンダルフイヨル、そしてエイヴィンダルダルと呼ばれている。

19

この時サームは品物を全部アザルボールに持ち帰る。そして帰宅すると、サームは自分のシングマンたちに人をやって、翌朝8時半前に自分のもとに来るようにと伝えさせる。その時には東に向かって荒野を越えていく腹づもりだった。「わたしたちの遠出はなるようになるだろうて」

晩になるとサームは床に入るが、屋敷にはすでに多くの人が集まってきていた。

フラウンケルの方は帰宅して、この出来事を語った。彼は食事をして、そのあと手もとに手勢を招集して、70人を集めることができる。この一団を率いて西に向かって荒野を越え、アザルボールに不意討ちをかけ、サームをベッドの中で捕えて、外に引っぱり出す。

そしてフラウンケルは言った、「サーム、おまえの今の有様は、つい先ほどまではありそうもないと思っていたかもしれないようになっていて、わしがおまえの命を思い通りにできるのだぞ。だが、おまえに対して、おまえがわしにしてくれたよりも酷い男にはならんでおこう。おまえに次の二つから一つを選ばせよう。一つは殺されること。もう一つはわしだけが二人の間を判断、裁定するというものだ」

サームは、自分は生きる方を選ぶと言うが、どちらを選んでも厳しいと思うとも語った。

フラウンケルは、彼にはそう思えるだろうと言った、「なにしろ、わたしたちはおまえにそういうお返しができるのだからな。そしておまえにそれだけの値打ちがあったら、この倍も親切にしてやたろうよ。おまえはアザルボールからレイクスカーラルに下りて行って、あそこの自分の屋敷に住むのだ。エイヴィンドのものだった財産は全部持っていけ。それ以外の財産は持って行ってはだめだ。おまえが自分でここに持ってきた物以外はな。持ってきたものは全部持ち去れ。わしは自分のゴジ権を取り返す。それから家屋敷もだ。見て分かるが、わしの財産は大いに殖えている。しかし、おまえはこれに与^{あずか}るわけにはいかない。弟エイヴィンドへの補償はなしとする。それは、おまえが前の身内のために厳しい訴えを起こしたからだ。そしておまえはわしの権力と財産を六年間も使ってきたのだから、おまえは身内エイナルのための十分な償いをとっている。そしてわしと思うに、エイヴィンドとその部下どもが殺されたことは、わしとわしの部下たちが片輪にされたことよりも重大ではない。おまえはわしを地区から追放した。しかしわしは、おまえがレイクスカーラルに住むのは我慢してやる。そして、おまえが身の破滅を招くほど高慢にしなければ、それで十分だ。わしとおまえが揃って生きている間は、おまえはわしの部下になるのだ。二人がこれ以上争うことがあれば、それだけ一層まずいことになる、肝に銘じておけ」

こうしてサームは家族をつれてレイクスーラルに下って行って、そこの自分の屋敷に住む。

20

さて、フラウンケルはアザルボールで部下たちに仕事を割り当てる。息子のソーリルをフラウンケル屋敷に住ませる。こうして地区全体に対するゴジ権をわが物にするのだ。アースビョルンは、年下だったので父親のもとにいた。

この冬、サームはレイクスカーラルにいた。そして押し黙って、出しゃばることもしなかった。彼は自分の現状にあまり満足していないと、多くの人が思った。

しかし、冬（も終りに近づいた頃）に日が長くなり出した時、サームは男を一人つれ、馬を三頭ひいて出かけて、橋を渡り、そこからモズルダル荒野を越え、そうして山のヨクル川を渡り、そうしてミュウヴァトン（湖）に達し、そこからフリースツ荒野とリョーサヴァツスカルズを越えて、旅の足を止めずに進み、西部のソルスカフィヨルドにやってきた。そこで彼は歓迎された。その頃、ソルケルは外国旅行から帰ったばかりだった。彼は四年間海外に出かけていた。

サームはそこに一週間いて、ゆっくり休んだ。それから彼は兄弟たちに、自分とフラウンケルとの争いのことを話して、以前のように援助と支持をまた頼む。

この時はソルゲイルが兄弟の側でよけい返答をして、自分たちはとても離れて住んでいると言った。「あっちとこっちの間の距離は大きい。この前は、出発する前にあんたのために十二分に用意してやったと思った。あんたの地位を保持するのが可能になるようにだ。ことは、あんたがフラウンケルの命を助けてやった時にわしかなるのではないかと思った通りになったわけだ。つまり、あのお情けを誰よりもあんたが一番後悔するだろうと思ったのだ。わしたち二人は、フラウンケルの命を取れとあんたに勧めたが、あんたは我を張った。フラウンケルがあんたを安穩に暮らさせておいて、あんたよりも優れていると思った男を片付けられる機会をまっ先に狙ったからには、あんたたち二人の頭の違いがどんなものか、たやすく見てとれるな。わしたちは、あんたのこの不運と関わりを持つことはできない。わしたちの名誉をたびたび危うくしてまで、フラウンケルと争うことを望む気持もないのだ。だが、こっちの方がフラウンケルの近くよりも安心だと思うのなら、あんたに、家族ぐるみこっちに移ってきてわしたちの保護を受けることを勧めたいが」

サームは、それは全然するつもりはないと答えて、家に帰ると言い、兄弟に自分と馬を換えてくれるようにと頼んだ。それはすぐに聞き届けられた。

彼ら兄弟はサームに立派な贈り物をやろうとしたが、彼は何も受け取ろうとはせずに、ただ兄弟は気が小さい人間だと、言った。こうしてサームは馬で帰宅し、そこに老年まで住んだ。彼は生きている間フラウンケルに刃向がえなかった。

フラウンケルの方は、自分の屋敷に住んで、己が名誉を失わずにいた。彼は病死したが、その墓塚はフラウンケルスダルで、アザルボールから離れた所にある。塚の中の彼のそばには莫大な財物、彼の武具すべて、そして彼の見事な槍とが入れられた。

彼の息子たちはゴジ権を継いだ。そしてソーリルはフラウンケル屋敷に、アースビョルンはアザルボールに住んだ。彼ら二人はゴジ権を共同で所有し、大人物と考えられた。

そして、ここでフラウンケルの話は終わる。

(完)